図書紹介

『ワクチンの噂
どう広まり、なぜいつまでも消えないのか』

みすず書房（定価三四〇〇円）
二〇二一年十一月十日刊
ハイジ・J・ラーソン 著
小田嶋由美子 訳

ワクチンの噂への著者の迫り方

本書はコロナウイルス発生の発表直前の二日前に脱稿した。

ワクチンを打つと「不妊症になる」「自閉症になる」「陰謀だ」「消毒薬で治る」などと人々を本気にさせ、破壊や妨害に走らせる『噂』がネット上を巡り口コミ等で拡散されている。

「ワクチンの噂」は、コロナウイルス蔓延する今もさらに発達し、世界中を駆け巡っている。

情報機器・通信手段の急速な発達も噂の拡散を助長している。

彼女はそれらの「噂」を「山火事」に例え、正面から攻めても容易に消えないと分析する。

著者は、ワクチンの効果に確信を持ち、人々に広める立場のワクチン推進派の研究者、普及や啓蒙に係る「当事者」だ。しかし、その著述思考について、巻末の「解説」で磯野真穂（人類学者）が以下に触れている。

「…ワクチンを推進する人々は、ワクチンの「正しさ」…、効果が高く、安全であることを言葉を尽くして解説…する傾向が強い」が、「彼女は、『なぜ人々はワクチンに反対するのか』という問いを非専門家の視点から理解しようと」した。「正しさへの謙虚さが根底にある」と、解説する。

本書では過去の経験や悲劇の歴史を随所に展開している。

情報の氾濫と噂のメデア論

ウクライナ侵略や米国大統領の国策報道などでも、その全てをそのまま信じることは難しい。画像が操作されたニセ情報もあり、情報戦争の側面も見え隠れする。

本書は、情報機器・技術等の発達した今日のメディア論でもある。

噂が広まる背景に、自分たちの切実な要求や不安に鈍感な、支配層やエリートへの不満があり、政策や権威の押し付けに、市民の怒りが集中的に表出したとも…。

噂を振りまく個人は、自分だけが知った「真実」を人に伝えたいとの使命感、正義感、そして達成感がある。悪意を持った噂の拡散の他に、不確かだが価値ある正しい噂として武漢の李医師のプロローグ（二〇二〇年五月十二日記）にも留意したい。

河合 靖久（所員）